

映画「わが青春つきるとも 伊藤千代子の生涯」

今の時代に反戦・平和のたたかいを励ます

4月2日、映画「わが青春つきるとも 伊藤千代子の生涯」を完成披露試写会で観させてもらった。折しもロシアのウクライナ侵略による戦争が起きているときである。

伊藤千代子は、弾圧法規である治安維持法により検挙され、悪名高き特高警察の拷問を受けて起訴され、未決のまま、市ヶ谷刑務所（現在の新宿区富久町にあった。その後、巣鴨に移された）に収監された。

検挙されたのは、当時、地下活動をしていた日本共産党を狙った1928年3月15日の弾圧・一斉検挙である。検挙者は1600余名にのぼり、その中に入党したばかりの女性活動家・伊藤千代子も入っていたのだ。

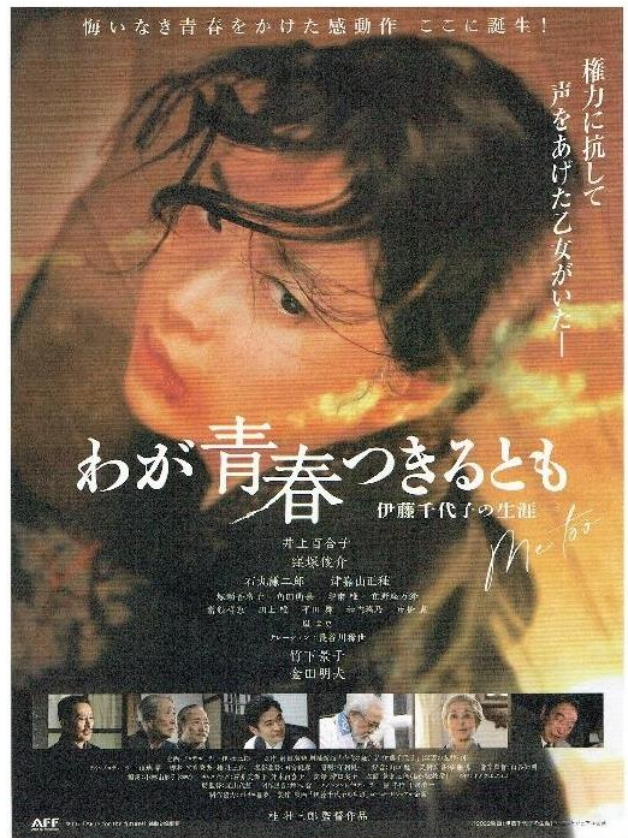
彼女は、獄中では拷問に耐え、変節せず志を貫き通した。その後、夫の変節などもあり、拘禁精神病を発症したため、特高警察の監視つきで松澤病院（現都立松沢病院）に収容され、急性肺炎で、1929年9月24日、24歳の若さで、短い生涯を閉じたのだ。

この翌年には、山本宣治（労働農民党から当選した代議士で、ひとり治安維持法に反対した）が神保町で右翼に刺殺されている。1933年には、作家の小林多喜二が築地署で特高警察に虐殺された。反戦を唱えるだけで、殺される時代であった。

伊藤千代子は、1905年、長野県諏訪郡に生まれた。諏訪高等女学校に進学し、歌人の土屋文明（彼女の死後、その死を悼み、「こころざしつ、たおれし少女よ」と詠んだ）に師事する。小学校の代用教員になるが、その後、東京に出て、東京女子大学に進学する。そこで、社会科学研究会の結成に参加し、女子学連のリーダーとなり、「山一林組製糸争議」の支援、労働農民党の選挙支援などに参加する。

伊藤千代子が20歳を過ぎた時代は、天皇制、そして、軍国主義の専制政治のもとで、国民は、天皇の臣民とされ、貧困と無権利状態に置かれていた。伊藤千代子は、そうした社会を変えよう、主権在民、反戦を掲げ、命の危険を承知で活動していた。

1925年に治安維持法が成立し、天皇制政府は、共産主義者、社会主義者、労働組合・農民組合の役員、知



識文化人など、思想犯罪者として逮捕し、弾圧した。

この時代は、日本が中国への侵略を本格的に進めていく時で、国内の反戦運動を完全に抑え込む必要があり、天皇制政府は、徹底して弾圧したのだ。そして、多くの若き活動家が治安維持法による弾圧で命を落としていった。伊藤千代子もその一人であった。

この映画は、日本が本格的な侵略戦争に入っていく時代の中で、厳しい時代に社会変革の志を持ち、反戦の闘いに必死に生きた若き女性活動家とそれを取り巻く人々の本当にあった真実の物語である。

伊藤千代子を演じたのは、映画デビューの新人・井上百合子である。監督の桂荘三郎（社会派）は、井上さんには、目が反骨にあふれるものがあったということで起用したとのこと。実際の伊藤千代子は、見た目、少女のような面持ちだが、目に力があるように思える。

原作は、藤田廣登の「時代の証言者 伊藤千代子」



今こそ憲法 9 条で世界平和実現を

2022 憲法大集会に 15000 人が結集

ロシアのウクライナ侵略という暴挙は、逆に戦争では世界平和を実現することは絶対に不可能であることを証明しています。憲法 9 条を掲げる日本の平和憲法を世界に広めることこそ日本の進むべき道です。来る参院選では断固たる野党共闘を！ 事務局メンバーと北大OBのみなさんは、「真相を広める会」の幟 2 本を立てて参加しました。（福島 清）

（学習の友社）である。

21 世紀の映画が不作で、社会的な問題を扱う映画がほとんどない中で、まじめな映画をよく作ったものだと感心する。

戦後、日本の侵略戦争の真実や悲惨さを明らかにした映画や日本の暗い時代の中で抵抗した人々を描いた映画、「戦争と人間」、「人間の条件」、「ひめゆりの塔」、「真空地帯」、小林多喜二や山本宣治を描いた映画などがあるが、みな 20 世紀に作られたものだ。21 世紀に作られたのは、この伊藤千代子の生涯を描いた映画だけではないだろうか。

今、ロシアによるウクライナ侵略が行われ、戦争が続いている。戦争は、双方の市民が悲惨さを味わうものだ。

今は、ロシアのウクライナ侵略を早く終わらせることが必要だ。それには、経済制裁と国際世論「プーチンは戦争をやめろ！ウクライナから即時完全撤退しろ！」ということが高めることが決定的に重要だ。そして、外交努力により、早く、終わらせることが求められる。

ところが、日本では、ロシアのウクライナ侵略を口実に、侵略されないためと言って、軍備拡大、核兵器を持とうという。そして、抑止力だけでは不安だから、「敵基地攻撃能力」も持とうという。そのために邪魔な憲法 9 条は早くなくしてしまおうという議論が声高に起こっている。憲法を取り巻く状況は、非常に危

険なものになっているのではないかと。

しかし、それぞれの国が軍備を拡大し、核兵器を持ったらどうなるか。抑止力が効かなくて戦争になったら、とんでもない犠牲がでるのではないかと。核戦争になったら人類の破滅につながりかねないものだ。ましてや、プーチンのような侵略を平気で行う者が出てきたら、抑止力はないに等しいものだ。

日本には、武器は持たない、戦争を放棄した憲法 9 条がある。憲法 9 条は、権力者に戦争をさせない力がある。しかし、この憲法 9 条をもっているだけで平和は守れない。攻め込まれないように、憲法 9 条を生かして、平和外交を行う、紛争になれば話し合いで解決することが大事である。東アジアでアセアンのような軍事同盟によらない、平和維持の枠組みを作っていくことが必要なのだと思う。

伊藤千代子の生涯を描いたこの映画は、4 月以降、首都圏、全国で上映される。この映画は、憲法を改悪して日本を軍事大国にする、核兵器も持って他国を脅し、戦争する国にしようとする流れが強まっている時期に、我々の戦争に反対し平和を守る闘いを励ますものとなっていると思う。

（千代田区労協議長 小林秀治）

*「真相を広める会」は、この映画製作支援カンパに協力しました。映画の冒頭で紹介された協力団体一覧の場面に記録されています。